

漢詩を味わう 第63回

華子崗 かしこう 裴迪 はいてき

落日松風起 落落日 松風起こり

還家草露晞 還家に還れば 草露晞く

雲光侵履跡 雲光 履跡を侵し

山翠拂人衣 山翠 人衣を払う

日が落ちると、松風が吹き起こる。
家路につこうとすると、朝、草を濡らしていた露はあとかたもなく乾いていた。
雲間から来る光が私の足あとにさしこんで
木々や草の葉が細道を歩む私の衣にまといついてくる。

《華子崗》 王維の詩「網川莊二十景の一」に唱和した作。華子は漢時代の仙人で崗は岡のこと。謝靈運が同名の詩を残しており、そのあとをついだと考えられる。
《草露晞》 晞は乾くこと。日の光をうけて朝露が乾いている。晞を稀に作る本もある。
《履跡》 人の歩いた足あと。
《払衣》 衣服にからみつく。

盛唐の詩人裴迪は王維の親友で終南山麓に住んでいました。近くには王維の別荘、網川荘があり互いに閑居往来して詩を唱和しました。王維には網川荘で詠んだ有名な網川集とよばれる二十首の連作がありますが、裴迪はこの王維の詩に和した作品を同じく二十首残しています。この華子崗はそのなかの一つです。
参考まで王維の華子崗を紹介します。

飛鳥去不窮 飛鳥去りて窮まらず
連山復秋色 連山復た秋色
上下華子崗 華子崗を上下すれば
惆悵情何極 惆悵として情何ぞ極まらん

王維が日中の情景を描いたのに対して、裴迪は日暮れ方、帰途にいつたときの光景をうたっています。
第一句は、岡を下りながら落日を眺めれば谷あいから涼風が吹きあげて松の枝をゆする情景です。第二句は朝に通った道の草露が乾いている様子を描き、時間の経過を暗示しています。第三句は第一句との落日との関連で夕焼け雲を描き、雲間からさす夕暮れの光が今朝方自分の残した足跡に落ちてくる情景で、結句では道をたどってゆくと木々の草が身にふれてくると述べ、全体を締めくくっています。
王維の詩の結句が「惆悵として情何ぞ極まらん」と情感豊かに思いにふけていることと対応して、草木でさえ情あるように我が身にふれてくる、と解釈もできますが、少々深読みし過ぎの気がします。この詩は山歩きを楽しむを軽いタッチで描いた純粹な叙景詩として読んだ方が適切のようです。

人人 暑を避けて走りて狂するが如し 独り禪師の房を出でざる有り 是れ禪房 熱の到る無かるべけんや 但だ能く心静かなれば即ち身も涼し



《大意》 世間の人々は、炎暑を避けようと、走り狂っているようなのに、禪師だけは、禪房から一步も外にお出ましでない。禪房だってこの熱気がとどかないはずがない。座禅を徹底しておられる禪師は、精神が安定しているので、肉体に涼しく感じておられるため、熱気をもものともされておられない。

(白居易詩・苦熱恒寂師の禪室に題す)

竹外茶烟静かに 籬間鳥聲閑なり



《大意》 竹林を隔てて茶を煮る煙が静かに立ちのほり、垣根のあたりに鳥聲が静かに聞こえる。(周中孚)

読み
情を千里の光に寄す（あの人を思うこの気持ちをも、千里のを照らす月の光に託したい。古楽府「子夜四時歌・秋歌」）

寄
情
千
里
光

佐藤象雲書

中央部は古典で奇と奇の例があるが、初唐の諸碑に倣って奇とした。

横画の分間を整え据わりよく。

第五・六画の起筆の位置に注意。
浮驚勾は内部空間を包み込むように。
横画は短めに。

傍の上下中心を整える

縦画は垂露の法でゆったりと。

懸針

垂露と同じく縦画の筆法で、針のどがつたように筆を抜き放つこと。何れも「書語」などの書論で楷書の基本点画として解釈している。

* 垂露

縦画の筆法で、速度をかけて筆を抜かずに、筆勢を緩めて、下端に露が垂れ溜まっているように穏やかに収筆する。



- 一般部規定課題出品について
- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
 - ・初段以下の方に限り、左に掲載しているように二文字または三文字でも構いません。
 - ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

寄情千里
寄情千里

寄情千里
寄情千里

次号課題

隸書

家之本
在身

寄情千里
寄情千里

家の本は身に在り

佛道崇虚

仏道は虚を崇び……

褚遂良・雁塔聖教序

(初唐・西暦六五三年)の臨書(19)

象雲臨



『佛道崇虚』

宋時代の書論に姜白石の書いた「続書譜」というものがあります。この書論で姜白石は、「書作に大切なものは、つとめて俗気を払い、巧を追わず自然のまま健勁な書作を図ること」と説いています。意識的な造形態度を排し、文字それ自体に備わっている固有の姿を発揮させることが肝心としています。王羲之、王献之を推している態度は、唐時代の孫過庭書譜と同様の価値観です。またこの書論のなかの「情性篇」はすべて孫過庭書譜の引用であるため、独自の書論として評価されていない欠点がありますが、この続書譜のなかで特に注目したいのは、「血脈・方円・向背・位置・疎密・遅速」などの書法についての内容です。次号から、この褚遂良の雁塔聖教序の書法と重ね合わせて具体的な各書法について考えてみたいと思います。

古より書を善くする者……

古より書を善くする者……

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書（1）

象雲臨

『自古之善書』

今月より孫過庭書譜を勉強していきます。本誌では幾度となく草書の重要古典として本欄で取り上げ勉強してきましたが、前号で述べた通り、古典は各人の書境や経験理解度などによって、古典の印象も変化していき、また新たな発見もあることと思います。

書譜は、ご存じのとおり唐時代の草書の名品で、六朝以来の伝統を踏まえた書論としても重要な古典です。著者の孫過庭に関しては正史に記載がなく、名字生卒にも諸説があり明確ではありません。また官位も率府録事參軍という低い地位で、陳子昂の墓誌銘に拠れば四十歳で仕官しましたが、讒言にあつて悲運のまま、四十代で亡くなったということです。

真蹟本は台北の国立故宮博物院の所蔵ですが、現在、東京国立博物館で開催中の「特別展 台北国立故宮博物院―神品至宝―」に本邦で初めて出展（八月三日までの展示）されていますので、ご覧になった方も多いと思います。

自古之善書

※右側に掲載の部分から四文字〜六文字を選んで出品のこと